読売新聞
THE YOMIURI SHIMBUN
第44113号 （日刊）©読売新聞社1999年
2月9日 火曜日 1999年（平成11年）
発行所 読売新聞社 東京都千代田区大手町1-7-1 郵便番号100-8055 電話(03)3242-1111

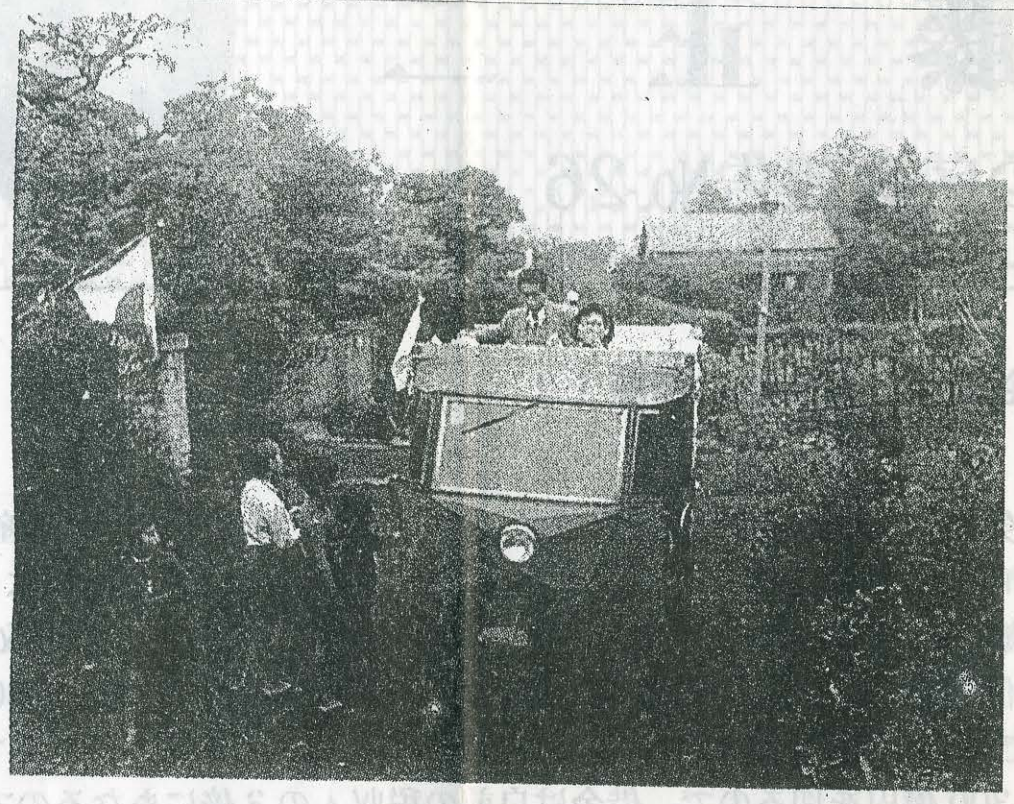
都民版

フラッシュバック 1

自治権

行政変革へ秘めた力

総与党化進み鈍り気味



「平和を守り、文化を高めよう」。中野区北部に広がる畑の中のでこぼこ道を奇妙な一団が声を張り上げて練り歩いている。先頭は詰め襟の学生服に角帽をかぶった青年。マイクを手に、必死の形相で訴えている。

敗戦の余韻が残る一九五一年（昭和二十六）四月、第二回統一地方選挙の中野区議選で初当選した近藤正二(73)（無所属）は、四十八年前の選挙戦の様子を今も鮮明に思い出す。現在十期目。二十三区全体で九百八十四人（昨年七月時点）いる区議の中で、戦後間もないころの議会を知る数少ない一人だ。

角帽をかぶった青年・近藤には、プラカードを持った若者たち十人ほどが付き従っていた。街頭演説の移動はリヤカー。バッテリー、アンプ、ラッパ形の大型スピーカーを積み、三人がかりで引いた。

教員志望だった近藤は当時、まだ東大で東洋史を学ぶ学生。区議選に立候補したのは、敗戦の翌年に結成した「北原文化クラブ」の活動がきっかけだった。

地域に開かれた学校を―。志を抱く若者たちが集まった。六・三・三制が導入されたが、食うや食わずの生活で、教育現場も「物資、人材。足りないことだらけだった」。その中で、小学校を拠点に文化人を招いた勉強会や絵の展覧会の開催などを続けた。

活動を通じて知り合った文化人の中に、後に映画化され、有名になった「二十四の瞳」の作者、壺井栄（故人）がいた。

「これからは地方自治体がしっかりしないと。区議選に出なさいよ」

ある日、中野区内にあった壺井の自宅に呼び出され、勧められた。即答を避け、当時、勉強会に参加していた哲学者の古在由重（故人）に相談した。すると、「実践活動のない歴史家は意味がない。私は（立候補に）賛成です」。その一言で迷いは吹っ切れた。

現在より八議席少ない四十の定数に百三十一人が立候補したが、近藤は二十七位で初当選した。

※

東京の地方自治は、転換期を迎えていた。区長を住民が選挙で選ぶ「公選制」を廃止しようという議論がわき起こったのだ。都は都議会を中心に「区に強力な自治権を与えるのは大都市の総合的な行政機能の障害になる」と主張、公選制廃止を国会に働きかけた。

「民主主義の根幹である地方自治の後退だ」。区側は党派を超えて反対運動を始め、近藤もその先頭に立った。二十五―三十五歳の青年議員たちが勉強会を組織、約四十人が参加した。

「区長公選制廃止反対！」。仲間の一人が調達した小型トラックの荷台に横断幕を掲げ、都内を街頭宣伝して回った。新宿、錦糸町など人出の多い駅前で、区議が交代でマイクを握った。

結果は区側の敗北に終わった。五二年八月、地方自治法が改正され、区長選びは「選任制」に変わった。区議会が区長候補を推薦、都知事の同意を得て選ばれる制度だ。現在のような公選制が復活したのは、七五年四月になって。公害、福祉、教育といった身近な問題を通して、きめ細かな地方自治の重要性が再認識された結果だった。

そして来年四月の都区制度改革。区は念願の「都と対等の地位」を手にする。清掃事業、区立幼稚園の職員の任命、教科書の採択といった業務が都から区に移管され、事務の幅が市町村並みに拡充されるのだ。

※

区議会は今、「オール与党化」が進み、区政に対するチェック機能を失ったと言われる。予算案を始め、区長が提案する議案が否決されることはほとんどない。「自分の選挙地盤の地域に公園や公民館を造る。区議はそのために、区政に異を唱えなくなった」。近藤は、いつのまにか狭い地域の権益に固執する区議の姿勢が目に付くようになったと指摘する。際限ない予算の取り合い。その結果、ほとんどの区が深刻な財政危機に直面するようになった。

「自治権拡充に燃えた時代、区議会にはいざとなれば党派を超えて共闘し合える変革のエネルギーがあった。与党の議員だって、予算審議となれば区長に食ってかかることも珍しくなかった」。だから、余計に現在の区議会の姿は歯がゆい。

近藤は自戒を込めて思う。「与えられる自治権に見合った姿に区議会も生まれ変わらなければ」

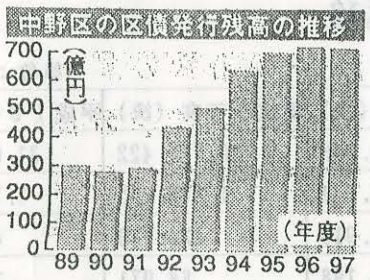
戦後、民主的な区議会制度が誕生して五十二年。制度改革を控えて、区議会の存在意義が改めて問われている。

（文中敬称略）

◇

身近な自治体の代表を選ぶ統一地方選挙が四月に近付いた。来年春には介護保険導入、都区制度改革が待ち受け、「本格的な地方分権時代のスタート」という掛け声も聞こえてくる。その中で実施される今世紀最後の統一選。私たちは、現状や未来を展望する前に、いま一度、戦後の区・市議会が歩んできた道のりのいくつかの辻に「フラッシュバック（突然過去の場面に戻ること）」することからスタートしてみたい。

▲第三回の統一地方選では、リヤカーにかわり、三輪トラックが使われた（中野区北部で、1955年）



【区の財政危機】中野区では、自治体の借金の一つである区債の発行残高がバブル崩壊以降に増加し始めた。九七年度は七百十八億円。同様に財政状態が厳しい墨田区でも七百六十八億円に上っている。中野区の場合、ホールや特別養護老人ホームの建設費が借金を膨らませた。

読売新聞が二十三区の自治権について特集を組むことになり、先月読売社会部の記者から「東京二十三区の自治の歴史に一番精通している人、と聞いた」として近藤に協力を求めました。近藤より読売記者に二十三区自治法の沿革に関する資料や近藤の過去の報告書を渡しながら解説をし、纏められたのが読売都民版に7回連載しております。

2月9日朝刊のシリーズ第1回には近藤が中心に記載されております。ご一覧下さい。